

ふて伯林に歸り、物理學の正員教授とあせり。ヘルムホルツ氏は請ふて此地に物理學研究所を起し、氏自から之に長として非常の隆盛を極め、全十八年の間此に従事す。後シーメンスの設立に係る物理學工藝學研究所に移れり。

ヘルムホルツ氏は始めエルナ、フチン、フェルテンと婚せり。此女の家柄は、祖父某フリードリヒ大王の危急を身を以て護りたる功を以て、世襲貴族に列せられたるものあり。然るに不幸にして千八百五十九年に、此女は一男兒を遺して死せり。後妻として氏は有名なる國法學者ロベルト、フチン、モドル氏の女アンナ、フチン、モールを娶り、二男兒一女兒を生めり。女はシーメンスの男に嫁す。

氏は實際に於ては極めて質直、極めて謙遜あり。氏が大にして活潑なる青き眼と、高き額と、爽快なる音聲とは、氏に接する人に一種愉快なる刺戟を與へ、覺へず仰慕の念を起さざめたりき。

文苑

鱒魚說

聚遠閣主人

鱒魚。溪間之一小魚耳。而余未嘗見其狀焉。近者。山口生歸省而來。持一魚。蓋以爲贈。余發而見之。潑然物躍。蹶然開口。余驚而欲仆。靜而觀之。則鱒魚也。其數三。長各七八寸。其大稱之。盤中游之。開鱗如扇。噴沫生波。其快不可言。吁。余以鱒魚爲溪間之一小魚。而今其長大。有如此者。豈非鱒魚中之魁者乎。古人謂。千人之長。合千人之氣。萬人之長。合萬人之氣。人之才量。奚有大差。爲貴爲賤。唯其所遭。苟所在爲長。則人之尊榮。莫尙於此矣。該撤不云乎。

吾與其爲羅馬第二等之長官。寧爲一村之長。吾觀鱈魚。不能無感焉。時會余妻生子在蓐。呱呱之聲。滿于耳。其爲英物與否。吾不得而知也。雖然。子生而屬望。父母之情也。不知亦爲一村之長。以不愧於斯魚耶。抑爲無用之長物。而溪間之一小魚之不及耶。余姑取以下吾子之將來。併以自勉云。

詣先人墳墓記 明治二十二年稿

飯田御世吉郎

先人棠陰君之墓。在峰春阜頭。阜距家數丁。隆隆突起於田畝之間。眺望豁然。可瞰數十里矣。春夏之交。方天暖風和。油菜鋪黃。牟麥漲翠。遠邇繡錯。燦如觀一大氈。遊人士女。絡繹成群。扇影衣香。與霞彩相亂。寂寥塋域。忽然變爲一場之熱鬧。海。今茲晚冬。余歸詣焉。此日朔風凜冽。寒氣沁骨。坡路崎嶇。登頓甚艱矣。已達放眸。風物悽愴。又無綠麥黃菜可觀。只有漠漠凍雲低地。與蕭條瘦樹環村耳。余悄然跪墓前。燭香供金盞花。默禱良久。萬感交攢。暗淚漣如。不覺嘆曰。嗟噫。人命真如朝露也。朝把手於堂上。夕忽變爲北邙一片之烟。回顧初余聞先人之病歸省也。先人拂首撫慰。備至矣。其夜喜而不寐。後數日。或告曰。龍泉池。境靜水清。宜以養病。先人諾。即日命輿而移焉。爾後病漸入膏肓。遂至朝不圖夕。當此時。衆醫投匙束手。傍觀親戚環枕。相視茫然。見翳々昏光之喜微。空嘆其命之日。感聞啞々曉鴉之飛鳴。徒悲藥石之無効焉而已。或托友人之來訪池畔祠上。謀畫後事於阿兄。或矚其熟睡。樹影暗處。談問遺言於阿母。誰知使養病之輿。變爲載屍之輿。奉養未浹旬。而溘然易質。嗟噫。悲夫。吾傷非鐵將挫。吾心非石將碎。思彼念此。滿腔傷然。泣下如雨。旣而自奮曰。死生命矣。夫